

ミュージアムコラム

武庫川女子大学附属総合ミュージアムでは、所蔵する国の登録有形民俗文化財「武庫川女子大学近代衣生活資料」全 9,092 点から季節の主題に沿う資料を選び、一年を通じて学術研究交流館（IR 館）1 階ロビーにて展示をおこなっています。

2025年度 秋季企画

秋の風物詩展

2025年9月16日(火)～12月19日(金)

秋には伝統行事が盛り沢山あり、今回の常設展示コーナーでは、秋の風物詩をテーマに選出した資料を時系列に沿って展示しています。

十五夜（旧暦 8 月 15 日）や十三夜（旧暦 9 月 13 日）の「お月見」（観月）にちなみ、1は満月を背にして雁が飛翔する姿の帯、2や5はお月見の時に供える秋草を文様にした裂、3は「重陽の節句」（9 月 9 日）に鑑賞する菊花が刺繍された帯揚げ、4は「秋分の日」（9 月 23 日）前後の秋彼岸の頃に咲く「彼岸花」を撮影したガラス乾板、6は「七五三」（11 月 15 日）で女兒が身に着ける晴着一式など、秋を彷彿とさせる多彩な資料が見られます。

今回の展示キャプション作成および陳列作業は、本学「博物館学芸員課程」の実習生達がミュージアム職員とともに行いました。すべての展示キャプションは実習生一人一人が書いたものです。博物館実習の学びの成果を是非ご覧ください。（平）

登録有形民俗文化財

1. 月に雁文様名古屋帯（昭和戦後期）

月を背に飛ぶ雁と金銀系の葦が表された、秋を代表する「葦雁文」の帯。紺・紫と色合いも相まって秋を写したようであるが、材質が薄手の絹であることから、残暑に秋の涼を求めて着られていたのではなかろうか。

雁は水辺にめがけて飛んでいるようにも見える。食欲の秋を楽しもうとしているのかもしれない。（実習生 塚田）

登録有形民俗文化財

2. 秋草文様反物（昭和期）

萩、菊、女郎花等、色彩豊かな秋草文様が麻地を華やかに染める。夏の余韻を残す芝草、赤や紫の紐で閉じられた虫籠は、澄んだ秋の訪れを告げるようだ。

この反物もかつては、当時の人々の日常に秋の彩りを届けていたのだろうか。（実習生 尾崎）



登録有形民俗文化財

3. 菊花文様帯揚げ（昭和初期）

赤地の一越縮緬に金・銀・白の菊の刺繍が施される。昭和初期に使用されたもので、菊花は長寿を保つと考えられた。菊の節句は成人女性の健康を祈願し、赤には身を守る呪力があるとされた。

当資料の使用時期は派手色が流行し、半襟と帯揚げを赤に合わせロマンチックに着こなしたのだろう。（実習生 齋藤）



4. ガラス乾板「彼岸花」（明治～昭和初期）

このガラス乾板には彼岸花がうつっている。

ガラス乾板は明治10年代に欧米から伝来し、写真フィルム考案のきっかけともなった。彼岸花は曼珠沙華とも言い、秋の彼岸頃、畔、堤などに咲く。秋の彼岸は先祖を祀る日だが、地域によっては生きている親も祀ることがあった。（実習生 久保）

登録有形民俗文化財

5. 秋草文様モスリン裂（昭和初期）

秋の七草である須々木、撫子、萩、桔梗が入った、可愛いピンク色が目を惹くモスリンである。モスリンは薄手で保温性に優れ、長襦袢の生地としても人気であった。

この資料の鮮やかさから、外から見えなくとも華やかな物を着用する乙女心が感じられる。（実習生 脇谷）

登録有形民俗文化財

6. 女兒晴れ着（昭和期）

七五三で着用された晴れ着で、毬を模したような円形の中に、菊や牡丹の華やかな文様や独楽や鼓といった縁起の良い文様が施されている。

七五三では、華やかな晴れ着に身を包んだ子供が健やかに成長したことを神様に感謝し、将来の幸せを願った。

（実習生 田辺）



参考出陳

7. 女兒結び帯（昭和中期）

8. 女兒草履（昭和～平成期）

次回の展示は、2026年1月中旬を予定しています。